



古川高等学校見学の様子

はじめに、日本史の門外漢の者がこの文章を書いていることをお断りする。専門とする方々から見ると浅学の者が偉そうに語っていると感じになることをお許し頂きたい。

毎年、3月に1年生を対象に吉野作造記念館を訪問させていただいている。吉野作造は中学校で使用する教科書にも登場し、また、郷土を代表する歴史的人物でもあるから、高校1年生にとっても既知の人物である。大正時代は、後に「大正デモクラ

# 吉野作造記念館に生徒を引率して

宮城県古川高等学校 教諭 上園 知明

シー」と呼ばれる民主主義的な風潮が起こる。吉野がデモクラシーを「民本主義」と訳し、政治の目的が民衆の福利にあると説く。今日の政治では当たり前のことではあるが、大正時代にそれを説く吉野には、ただ敬服するのみである。

大正時代は第一次、第二次の護憲運動が起こったり、本格的な政党内閣の原敬内閣や護憲三派の内閣である加藤高明内閣が成立するなど、かなり民主的な時代であったと考えられる。その後、昭和初期も五・一五事件で犬養内閣が倒れるまでの間は憲政の常道とよばれる政党政治が行われた。

中学校の社会科で現在の日本政治のしくみを学ぶ。そのときに、明治憲法下での政治と日本国憲法下の政治を比較したりするので、日本は第二次世界大戦後に民主的な政治がスタートしたかのような印象を中学生は持ちやすい。しかし、大正時代に見られるように、民主的な政治は戦前の明治憲法下でも行われていた。

生徒たちは吉野作造記念館の



古川高等学校見学の様子

見学を通して、大正デモクラシーを学ぶとともに民主的な政治が成立した後でも、戦争の時代が来た過去を学び、日本が今後、戦争をしないためにはどのような進めればよいのか、逆にどのような歴史を歩んではいけないのかを考えるきっかけにして欲しいと思う。歴史から学ぶのが賢者である。

# 千葉亀雄と吉野作造

前吉野先生を記念する会 会長 高橋 よし子



吉野作造の『学友』の一人を紹介したい。ほんの短かい間ではあるが、仙台の第一中学校で机を並べた仲である。

隣町の美里町図書館正面の壁には和服に見事なカイゼル髯をたくわえた紳士の姿が大きく描かれている。この人物こそ「美

里町近代文学館」の主、千葉亀雄である。千葉は吉野と同じ明治十一年の生まれであり、同じ年に仙台の尋常中学校（現在仙台一高）に入学したのであるが、六歳の時、山形県酒田中学校で教師をしていた父を失い、父の郷里の不動堂村に帰って来たのである。

しかしこの地でも女手で子供達を育てるのは無理だったので、一番小さい亀雄の小学校卒業と同時に仙台へ移り住み、亀雄は中学校に入り、母は住み込みで働くことになった。つまり家族はばらばらに住むことになった。亀雄は牛乳や新聞の配達をしながら生活し、投稿雑誌『文庫』に投稿しながら、ひたすら文学への道をめざした。文章修業と同時に英語の学習に没頭した。世界文学は英訳本として日本に入っていたので、英語読解力を確かなものとしていた亀雄は驚異的速度で読破していった。

『文庫』へ投稿する千葉の文章は、形・内容共に充実して来ていたので、選者に認められ、明治三十二年一月、二十二歳で内外出版協会へ入社が叶い、ここにジャーナリストとしての千葉の生涯が始まった。その後、数々の大新聞の編集長、学芸部長などを経るうち、日本の作家達を育てることに大いに力をつくした。

吉野の歿後編まれた『故吉野博士を語る』にも千葉も一文を寄せている。これによると、千葉は吉野達が催す会合に出席して吉野の様子をやさしく見守っていたようだ。時には、呟き込む背中をさすっていたのではないかと思われる程だ。そして、断言する。「吉野君ほどの人物を出したのだから、宮城県ももう自慢していいのではないかと。」